麗しの横浜正金銀行

寺西 俊英

「現金のことを正金ともいう」ことを皆さんはご存じであろうか。斯く言う私は、つい最近知った。「正金」を辞典で見ると、「①正貨。紙幣に対し、金銀貨幣をいう。②現金」と出ている。知るきっかけとなったのは今年の2月、桜木町で友人と待ち合わせたとき、早く着きすぎて時間を持て余したので近くを散策していた時のことだ。

弁天橋を渡り馬車道あたりをそぞろ歩いていると、「神奈川県立歴史博物館」の前に出た。石造りの3～4階建の重厚な建築物である。いつもは車で通りすぎるだけであったが、正面玄関に立つと説明板があるので何気なく読んでいると、何とここはその昔「横浜正金銀行本店」だったと書いてあったのだ。ここが近代史にその名を輝かせていた銀行の本店だったのか!! と、世の中には知らないことが沢山あるものだとついつい感心してしまった。家に帰り早速ネットで「横浜正金銀行」を調べてみた。そこで正金銀行の〈正金〉とは現金の意味だと知った次第である。

話は2007年に遡る。この年の7月私は大連に赴任したが、社宅からさほど離れていないところに中山広場があった。円形の広場の周囲にはヤマトホテル(現大連賓館)をはじめ、戦前からの石造りの建物が立ち並びレトロな景観を醸し出している。見られた方も多いと思うが、その中に一際目を引くのが「旧横浜正金銀行大連支店」である。

建物には大きなドーム屋根がのっかり、夜ともなると緑色の光にライトアップされたその姿はため息の出るほどの美しさである。夏の夜は夕涼みがてら、ときおりここまで来たものである。銀行の名前だけは知ってはいたが、この建物を見たとき以来正金銀行のファンとなった。「アカシアの大連」を書いた芥川賞作家の清岡卓行の大連小景集にはこのあたりを次のように書いている。

《……車は中山広場の大きな円周の一部を廻っている。広場に面した十棟の建物は、薄緑のドームを三つ載せて古雅な中国銀行大連分局、すなわち昔の横浜正金銀行大連支店をはじめとしてすべて堂々としたものである。その銀行と広場をはさんで向かい合うのは米国ルネッサンス式の四階建てで薄い黄味のピンクの外装の、豪華な大連賓館すなわち昔の大連ヤマトホテルである。》

戦前の大連中山広場　正面奥の建物が旧横浜正金銀行大連支店(絵はがきから)

旧横浜正金銀行大連支店を見上げる

さて、この銀行は今はない。ここで歴史を振り返ってみたい。同行は貿易金融・外国為替に特化した銀行であり、1879年に国立銀行条例に基づき設立された。当時は外国為替システムが未熟の時代であり、日本の不利益を軽減するため現金(正金)で貿易決済を行うことを主要業務とした。明治維新後急速に成長を遂げ、列強の仲間入りを目指す日本を国際金融面で支えた。そして後述するように海外に多くの支店網を形成した。日露戦争後、日本の支配地が拡大するにつれ日本円の流通地域も拡大し、朝鮮半島、樺太、台湾さらには満州国には内地の円が流通した。

商用等でこれらの地域を旅する際、横浜正金銀行の信用状を携行し各地の支店で両替できたようである。

このようになくてはならない銀行に成長する中で、関東大震災（1923年）と1929年の世界恐慌の波を被った昭和金融恐慌（1930年～ 1931年）では大きなダメージを受けた。

さらには第二次世界大戦で敗れたことにより同行はGHQにより日本の軍需に必要な国際通貨収集のための機関とみなされ、ついに1946年に解体という運命を辿った。時代の荒波に翻弄されながらも日本国のために必死に働き、最後は力尽きた感があるが、ある種の郷愁を感ずるのは私だけではないと思う。1946年生まれの私にとっては、生まれた年に解体されたと思うとかすかな痛みさえ感じないではいられない。

同行は国内外に広い支店網を展開した。国内では、京都、神戸、長崎、門司、小樽等に、海外は中国に多くの店舗を設置した。北京、上海、大連、哈爾濱、奉天（瀋陽）、青島、天津、済南、漢口等である。またニューヨーク支店、シアトル支店、ハワイ支店、さらにはリヨン支店も置いた。これらのなかで見たことのある建物は、大連支店と上海支店である。昨年の夏ハルピンに旅行したが、知っていれば写真の一枚でも撮ってきたものをと思うと残念である。

大連支店に話を戻すと、この印象的なデザインを考えたのは妻木頼黄（つまきよりなか）（1859年～ 1916年）という人である。彼は同行では本店、北京支店、大連支店を設計している。北京支店の写真は見たことがないので知らないが本店と大連支店はなんとなく似ている感じがする。どちらもドームがのっかっているからかもしれない。

ドームの形で思い出すのは復元された東京駅のドーム屋根である。今年2月15日、BS5チャンネルで「東京駅100年の謎」という2時間番組を放映していた。内容は東京駅を設計した辰野金吾（1859年～ 1919年）の一生であり、日本の建築の黎明期に活躍し、日本近代建築の父ともいえる人の足跡を辿った番組であった。妻木は彼の後輩なのである。このような建築様式は先輩の影響を受けたのか、または当時の流行の先端かもしれないがマッチ箱をタテにしたような設計しかできない現代の建築家には彼らの爪の垢でも飲んでもらいたい。

最近、大阪に日本一高い「あべのハルカス」とか言うビルができたが、私には美しいとは思われない。このビルも100年と持たないであろう。1914年に完成した美しく壮大な東京駅は関東大震災にもびくともしなかったそうである。しかし第二次世界大戦で米軍機による爆撃で大きな被害を受けながらも、当初3階建ての東京駅を2階建てに修復して使用していたのである。それが2012年10月1日に元の3階建てに復原されたことは誠に喜ばしいことである。すこし横道にそれるが、瀋陽駅を見られた方はお分かりになると思うがこの駅は辰野式と言われる、ドーム屋根の付いた赤レンガの駅である。東京駅によく似ている。それもそのはずで設計は辰野金吾の弟子の太田毅によるものである。東京駅の完成より4年早い1910年に竣工しているが、辰野の影響がよく出ているといえよう。

横浜正金銀行の話はこれで終わりではない。1946年に解体されたわけであるが、同行の業務を引き継いだ銀行がある。それは東京銀行である。

国は同年に株式会社東京銀行を設立し、業務を引き継がせた。その後1954年、外国為替銀行法に基づき日本で唯一の外国為替銀行になった。そして紆余曲折を経て1996年4月に三菱銀行と合併し、「東京三菱銀行」となった。さらに2006年には厳しい経営を余儀なくされていたUFJ銀行（2002年に三和銀行と東海銀行が合併した銀行）を救済合併し現在の「三菱東京UFJ銀行」となった。

最後に横浜正金銀行の流れを汲むともいえる「東京銀行」の行風を書いておきたい。同行は保守的な銀行業界にあって、リベラルな行風で有名であった。いくつか紹介するとまず女性を活用した。未だに日本は先進国にも拘わらず、経営職や管理職への女性登用が情けないことに諸外国に比べてかなり立ち遅れている。しかし、同行は当時でも女性管理職は何人もいて中には部長や本部長の職に就く人もいたという。当然ながら大卒女子学生の人気企業であった。男女雇用均等法の施行前のことであり大いに評価すべきことである。

上司に対しては「さん」づけで呼んだりして、マスコミで何度も取り上げていた記憶が私にはある。当時銀行員は白いワイシャツに紺か黒のスーツと相場が決まっていたが、ハイカラな東京銀行はカラーシャツを着こなしていたようだ。この様な行風はおそらく三菱銀行との合併によっていつの間にか雲散霧消したことは想像に難くない。合併を機に三菱の行風になじめない行員がたくさんこの合併した銀行から去ったという。しかしながら私としては横浜正金銀行の何パーセントでもその血が流れている同行に親しみを感じるし、エールを送りたい。